

# 人生は出逢い

## メロンファーム・うえむら

### 上村 美智子

上村 美智子(うえむら みちこ)さん

1943年静岡県焼津市生まれ。1965年結婚して旭川市へ。1971年公務員だったご主人が脱サラし、メロン農家に転身。全国の農村婦人を回覧ノートで結ぶ「ともしび」「パイアム」の代表世話人。著書に自分史「花びらのつづく道」、詩集「花かげ」(共著)など。なお、上村さんの人柄や幅広い日常活動については、'96.2.1 北海道新聞夕刊「生きる」欄に詳しく掲載されている。

## 天が預けてくれたもの

一九九六年新春、営農計画書を前に夫が「今年で、農地の償還が終わるナ」と言った。淡々とした口調に私も感慨を覚えつつ、「そう今年でねエ……………」と、窓越しのしずり雪に見入った。

庭の木に、こんもりと雪が積もっている。張り出した枝がしつかり支えた木々の成長に、めぐりめいた夫と私の農業生活が凝縮されているようだ。

過ぎてしまえば歳月とは絵のよなもの、心という額縁の中に静かに、納まっている。過程こそが歴史だと思うのだが、それに至るプロセス、汗や惑いなどカンパスには描かれていない。歳月とは、諸々を包み、流し清めてくれるということであらう。

サラリーマン生活から農業者に転じて二十五年目の春、今この北海道の一点が自分の土地に――、汗を流しつつつけてきたが、晴れて

我ら夫婦の所有になろうとしている。そんな今、これまでとは異なる思いが湧いて来る。離農跡地を求め、無一物のあの日から四半世紀、農地の取得資金の返還最終年を迎えたが、それまでの夫婦身につで生産活動をした農業で生きんがための葛藤の部分がなぜか愛しくさえ漂って来るのだった。

側から見ても決して順風満帆とはいえない土と共に生きて、あの現実を懐かしくさえ思えるこんにち、ふと、耕し続けてきたこの田畑は、天からの預かりもの“ではなかったかという思いにかられている。

人に望みを与え続ける大地、生きる糧を授けてくれた肥沃な土、私は、今さらながら平伏してしまう。村に来たあの日から、いつか自分のモノになるんだという励みが活力になつてもいた。しかしそれは、耕した歳月と引替えに受け取るのではなく、脱サラ農民の我ら夫婦が、営々と向かい合ってきた日々の足跡から農村ならではのあり方を教えてくれた礎だったのではと考へもする。

## 「旅は道連れ」 出逢いは広がる

新規参入のしがない農業人生にこうした気持ちを抱かせるのは、基底に、農業は自然と共存し社会を育む尊い職業であるという信念が浮かんでくる。いつぼう、土と歩んだからこそめぐり逢えた人がいて、その出逢った人々とのふれ

合い、つながりが私のエネルギーになっていった。

「人生は出逢い」と言う。出逢いは誰にもあるが、それに気づくか、通り過ぎてしまいかだとも言う。出逢いは確かに不思議なものだ。どこで出逢い、どう結び合っていくか、互いのコミュニケーションによって左右される。

私は、旅先や広域集会などで親しくなった人に、農村の暮らしに



メロンと野菜の産直  
◀ 作った人の顔がわかる農産物として消費者に送り届けます

ついてよく質問を受ける。私の家では家族労働で足りるほどの面積でメロンを栽培しているが、街の人は農業に関心を示し、私の農村生活に関心を寄せる。そして、話が弾んだあと、「あなたの育てたメロンを食べてみたい」と言う。これはもう栽培者にとってなによりありがたい言葉で、生産への意欲が湧く。年々私は人との出逢いの妙味を覚え、感謝しながら消費者とのつながりを大切にしようになった。

生産者と都会の消費者との出逢いは意外なところで発展する。たとえばある時、私は郷里静岡から上りの東海道新幹線の中で隣席の女性と言葉交わした。旅は道連れ、終点の東京が近づくと姫路から乗ったというAさんは、「もつとお話をしたいが、時間はありませんか」と問うのであった。

私は里帰りの実家から旭川の自宅へ戻るところ。上野発の寝台特急に乗る前に、上野の「森の美術館」に寄って行こうと早めに静岡を発っていた。

二人は山手線に乗った。Aさん

は秋葉原で乗換えと言う。そして私に、「一緒に降りて、お茶でも」とアプローチしてきた。北海道と静岡を何十回と往復してきたが、私は過去一度も秋葉原に下車したことはなく上野に直行していた。都会のご真ん中で、「もつと農業の話聞かせてほしい、農業をしている人と直接こうしてお話できる機会はなかなかないので」と説得され、私も途中下車を決めた。袖すり合った縁、真剣なまなざしであったし、農業雑誌「家の光」の存在を知っていたことも、なぜか私の心をほぐした。

秋葉原駅に降り電気関連の店に目をやりながら、とある食事処に私たちは落ちついた。リードを取りながら、Aさんは私に会話を求め、特に「農業・農産物」について積極的に話しかけてくるのだ。そして別れ際に、私の家で採れるものを送って欲しいと住所メモを渡してくれた。それから毎年、春のグリーンアスパラガスから始まって夏のメロン、秋にはトウモロコシ等、産地直送のおつき合いが始まったのである。



▲メロン畑でお孫さんとご一緒の上村さん



▲街に住む友だちもピクニック気分  
メロン畑へお弁当を持って手伝いにきます

## 農業・農村からの アピールを!

Bさんと知り合ったのはNHKラジオの「早起鳥」という番組が縁だった。番組は前日に収録したが、私は緑黄色野菜ハイアム(別名ジャワホウレンソウ)と、農村女性の生活文集「あぜみち」発行について番組参加を求められていた。早朝の放送だったが全国から手紙や問い合わせがあり、Bさんもそうした一人だった。ハイアムの種と文集を郵送してあげると、趣味で編んだという素敵な籠を贈られた。こうしておつき合いは始まったが、Bさんが私の家のメロンを友人知人への中元ギフトとして注文を下さるようになったのはずっと後になってからだった。「もっと早く教えて頂けたらよかった」と申され、私は都会の消費者との接点、生産者からのアピールの必要性を感じた。

Aさんが私に野菜などを送って欲しいと思いついたのは、「作った人がわかる農産物が食べられるなんて、安心でとても嬉しいことだから」と言う。Bさんとの産直の話のはじまりは、「旅行した北海道の土産店で注文した見本のメロンと到着した品物の質の差で失望していたけど、栽培している人から送って頂けるなら安心」と。

Cさんは私の旅先、岩手で出逢った。訪ねた友人宅にちょうど保険の勧誘に来た郵便局員さんで、北海道の話を珍しげに聞いた後、私のメロンを食べたいと言い、それから季節になると産直のお尋ねをしていたが、注文しなくとも毎年発送して下さいと手紙が来た。

学生時代に机を並べた友人が北海道旅行で旭川空港に降りると連絡が来た。私は、彼女の仲間の人達の間も、熟れたメロンを食べやすくカットして持って行った。

「北海道に着くなり思いがけない差入れ、すばらしい北の味覚だ」と大層喜ばれて、後日、同行のみなさんも産地直送を希望した。

最近では、ヨーロッパに旅した時だった。ツアー一行の自己紹介の折り、当然私は「北海道で農業をしています」と挨拶をした。そして「農業生活の体験記が入賞して、この旅行が与えられました」と加えた。ヨーロッパを巡り、帰国の途に発つ頃は、農業者としての私に理解を深めて頂き、半数以上の人々がメロン直送を申し出て下さった。

## 消費者の農業理解は 広まっている

社会一般では余程「農村女性」に特異な観念があるのか、私が行く先々で「農業をしている」と言うたびにびっくりする。そして話に花が咲いて賑やかになっていく。以前の私は、ことさら進んで職業を口にすることもなかったと思う。近年は行動も広くなり、異業種の方々との出逢いも多くなっていることもあって、最初に農村で暮らしていることを伝える。そのほうが話題が広がり、対話もスムーズに運ぶと思うからだ。

「農業をしている」と言う以前は、いまア、たいへんねーといった反応だったが、近頃は関心度も高く、消費者のほうから近づいて来る時代になった。農業は田舎で農産物を作っている人の



▲上村さんご夫妻とお孫さん



▲ご家族おそろいで楽しい食事のひとつ

ことだけでなく、自分たちの日常に深く関わる職業だということを理解しはじめた。そういう認識が都会の消費者の間に広まってきていると思う。

農村社会も徐々に売上げや経済中心の経営から、農村ならではの暮らしをアピールできるような経営を目標に、ある程度今の経営を維持しつつ、ゆとりのある生活をしたいと望んでいる人が私の周りにも多い。そう望む人に、非農業者との交わりがプラスされたら大いに刺激剤になるように思う。もちろん農業をもっと知りたいと求めているのだから手はつなげる。

「農業に元気がないのは、広がりを持たないからだ」という提言（JANA「七」町青年部長）があった。なるほど、わかりやすい意見だ。言い換えれば、広く交流を図るところに元気の農業あり、ということ。自分から接近することが苦手とされる農村の人々、せめて出逢った街の住人との縁を深めて新鮮に生きたいと思う。異業種の知り合いが増えると、消費者の所望がわかり、第一次産業の喜びや

汗、また、彼らに農村の文化を伝えることが出来る。

今、農業に、農村生活に憧れを抱く人がずいぶん増えているようだ。本州の私の知り合いも「公務員退職後に夫婦で農業をしたいから土地を捜してほしい」と言っていた。Uターン青年や新規就農者の意識調査でも「総合的にみて、就農して良かった点が多い」と考える人が圧倒的多数だという。物を作るという仕事は発見する仕事でもあるから、柔軟な思考を持つ農業新参者たちは生活の楽しみ方を知っているのだと思う。

### 農村現場からさわやかな アグリ・メッセージを！

自然を相手の農業は確かに容易ではない。でも、物を生産して社会に役に立つという観点からして価値ある職業ではないか。百姓は創造の民であると自負して来た我が家の四半世紀だが、額に汗しながらも充実感ややすらぎがあったからこそと振り返っている。

この頃は、畑から採れる物についてひとつの考えを持つように

なった。それは、よい食べ物にはメッセージがあるということ。土と水、太陽に恵まれ稔った産物、手がけた人のこころが育んだ本物のメッセージ……………。

出逢った人たちに細やかな産地直送をして、私が感じ、教えられたのは作る人と受け取る人の心の交わり、信頼感の大切さだった。個人の出逢いには限りがあるけれど、こちらも受け取る人の顔や気持ちを感じつつ箱に納めるので、単に青果市場に運ぶのとは違った生産者意識が芽生えて、農業者として育てられもする。

農村に生きる一人として、これからも大いに消費者と交流し、さわやかなアグリ・メッセージャーになりたいと思う。

### 消費者の希望に合わせて 野菜も混合詰め合わせ

